



Data

監督・脚本: ペアニレ・フィシャー・クリステンセン

出演: アルバ・アウグスト/マリ
ア・ボネヴィー/マグヌス・クレッベル/ヘンリック・ラフ
アエルセン/トリーネ・ディアホム/リーブ・ルモイン/
ソフィーア・カーレミール/
ブジョン・グスタフソン

👁️👁️ みどころ

アンデルセンやグリム兄弟はよく知っているが、世界で4番目に多く翻訳された児童文学作家アストリッド・リンドグレンのことを、私は専断にして知らなかった。それを本作ではじめて学ぶことに。

子供時代にアストリッドの本に夢中になって育ったデンマークの女性監督ペアニレ・フィシャー・クリステンセンは、アストリッドがとても若かった頃、「決定的に変えた何か」を描くべく、16歳から約10年間の彼女にフォーカス！19歳で不倫の子を宿したアストリッドの決断は？そして、スウェーデンにおける姦罪とは？また、デンマークにおける里親制度とは？

波乱万丈の生涯は多くの作家に共通するが、とりわけ若い日のそれはすごい。出産と別れそして新たな男との出会いの中、あなたはアストリッドの中にどんな本性を発見？この女、ある意味では魔性の女・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■世界でNO.4の児童文学作家をはじめて知ること！■□■

私は小学生時代に図書館にあった少年少女世界文学全集を片っ端から読んだ。もともと、私は男の子だったから、やはり『十五少年漂流記』や、『海底二万里』等、男の子向けのものが多く、『赤毛のアン』や『若草物語』などはあまり印象に残っていなかった。また、グリム童話のお話は、もっと小さい時に母親から読んで聞かせてもらったり、絵本で見たものが多い。そんな私ではじめて知ったのは、本作の主人公になった少女アストリッド・リンドグレンは、①イーニッド・ブライトン、②アンデルセン、③グリム兄弟に次いで世界で4番目に多く翻訳された児童文学作家だということ。しかし、私は①のイーニッド・

ブライトンも、④のアストリッド・リンドグリーンも全く知らなかったから、自分の教養の無さを恥じるばかり・・・。

本作のパンフレットには、①金原由佳（映画ジャーナリスト）の「子供たちへの愛の手紙」という「作品研究」、②菱木晃子（北欧児童文学翻訳家）の「アストリッド・リンドグリーンのこと」という「背景解説」があり、これを読めばアストリッドのことがよくわかる。その他にも、③古内一絵（作家）の「闇が深ければ深いほど」、④近衛はな（女優・脚本家）の「光があふれる」、⑤最上敏樹（早稲田大学教授・国際法）の「深い悲しみへの代償」という3本のコラム（解説）があり、そこではリンドグリーン文学についてのうんちくが各自各様に語られている。

もっとも、3本目のコラムである最上氏の「深い悲しみへの代償」は、彼が早稲田大学の国際法の教授であるだけに、アストリッドの優れた児童文学とはまた別の驚くべき秀逸な記録である『リンドグリーンの戦争日記』（岩波書店）について解説しているから、私はむしろこちらの方が興味深い。但し、本作にそこまでの「膨らみ」を持たせるのは無理で、本作を監督するについて、16歳から10年余のアストリッドに焦点を当てたクリステンセン監督の意図は理解できるし、それはそれとして成功している。しかし、本作を鑑賞した者としては、本作を契機として、アストリッドが児童文学作家として最初の出版に成功した後の歩みについても、しっかり勉強する必要がある。

■□■なぜ、そんなに子供の気持ちがわかるのですか？■□■

映画にはよく、冒頭に1人の老人が登場し、懐古談を語り始めるところから本格的なストーリーが始まっていくスタイルがある。ジェームズ・キャメロン監督の『タイタニック』（97年）も、張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『初恋のきた道』（00年）もそうだった（『シネマ3』62頁、『シネマ5』194頁）。また、日本初の女医の誕生を描いた『一粒の麦 荻野吟子の生涯』（19年）も、功成り名を遂げた主人公の講演風景から始まり、そのシーンで終わっていた。本作もそれと同じように、冒頭は一人暮らしの老人アストリッド・リンドグリーンが、世界中の子供たちから届いた手紙を一通一通開封し、目を通しての姿が描かれる。近時は手紙の中にカセットテープが入っているものもあるから、それは読むだけでなくカセットデッキで聞く必要がある。すると、そのテープからは、「あなたはなぜ、そんなに子供の気持ちがわかるのですか？」と質問する声が。さあ、それに対してアストリッドはどんな回答を？

前述したように、スウェーデン生まれのアストリッドは、世界で4番目に多く翻訳された児童文学作家だが、私は全く知らなかった。しかし、本作の脚本を書き、監督した1969年生まれ的女性ペアニレ・フィシャー・クリステンセンは、子供時代からアストリッドの本に夢中になっていたらしい。本作のパンフレットの冒頭には、「Director's Comment 監督の言葉」として、「親愛なるアストリッド・リンドグリーン様」があり、それは次の文

章ではじまっている。すなわち、

私は、子供時代のほとんどをスモーランドの森の中で過ごしました。それはとても素朴な生活で、電気もお湯もトイレも電話もテレビもなく、周りには同世代の子供たちもいませんでした。私はよく退屈して、ほとんどひとりぼっちでしたが、幸運なことに本に夢中になることができました。それがあなたの本だったのです。

続いてクリステンセン監督は、

あなたは、私が自分の存在理由について考えるきっかけをくれた初めての人でした。この世には悪と善が存在すること、死からは逃れられないということ、許しは与えられること、でも人生において信仰は最も強い力を持つこと、そんなことをあなたは教えてくれました。

あなたは私を形作った人です。でも、それなら何があなたを形作ったのでしょうか？

と自ら問を發している。

つまり、本作冒頭で、子供たちからの手紙の中で提示される、「あなたはなぜ、そんなにも子供の気持ちがわかるのですか？」との質問は、クリステンセン監督自身の質問でもあるわけだ。その上で、クリステンセン監督はその答えとして次の3点を挙げている。すなわち、

それは、あなたに子供の魂を理解する鋭い洞察力を与えた何か。

それは、あなたに当時の社会規範や宗教、文化を打ち壊させた何か。

そして、それはあなたを私たちの時代で最も革新的で影響力のある芸術家の一人たらしめた何か。

なるほど、なるほど。もつとも、これは前述の質問に対するクリステンセン監督の答えであって、決して普遍的なものではないし、まして「それが正解」と言えるものでもない。クリステンセン監督はそれを前提として、最後に「その出来事が、私の物語『リンドグリーン』を生み出したのです。」と締めくくっているが、さて、本作はどんな映画？

私は近時『コレット』(18年)、『シネマ 45』177頁)でフランスの女流作家シドニー＝ガブリエル・コレットを、『メアリーの総て』(17年)、『シネマ 43』未掲載)でイギリスの女流作家メアリー・シェリーを、『あなたはまだ帰ってこない』(17年)、『シネマ 43』220頁)でフランスの女流作家マルグリッド・デュラスをはじめて知ったが、さて、アストリッド・リンドグリーンはどんな児童文学作家なの？そう思っていると、本作はそんな私の疑問に答えてくれるものではなく、まさにこの「Director's Comment」にあるような「3つの何か？」を、クリステンセン監督なりの視点で描くものだった。そんな心地よい裏切りを含めて、私は本作に星5つを！

■□産まないという選択肢は？男の誠意は？女の決断は？■□

私が20歳になったのは1969年1月26日。大学2回生の冬だ。当時は学生運動に明け暮れる毎日で、ビラ配りとアジ演説に忙しかったが、それでも青春真っ盛りの時代だから、あちこちの友人たちの中で恋愛関係が広がり、その中にはまれに妊娠騒動に発展するケースもあった。しかし、幸いなことに(?)、日本では「墮ろす」のは簡単で、男の同意書と10万円程度の金さえあればそれができたから、そんな現実もチラホラと……。私が弁護士になって10年も経った頃には、大阪の某女子高では、同級生が妊娠すると、自動的に墮ろすためのカンパ活動が組織されるという話まで聞かされていた。日本はそんな「墮胎天国」だが、さて1920年代のスウェーデンは?

16歳で中学校を優秀な成績で卒業したアストリッド(アルバ・アウグスト)はヴィンメルビー新聞で働き始めたが、本作を観ていると、その実力の発揮ぶりがすごい。『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年)、『シネマ9』258頁)では、青森から東京の鈴木オートに集団就職してきた六子ちゃんは、「真面目な働き手」というだけの存在だったが、本作のアストリッドは自ら取材し、自ら記事を書き、それが編集長のブロムベルイ(ヘンリック・ラファエルセン)に絶賛されていたからすごい。これは、彼女が子供の時から自分で物語を作り、それを兄や妹に話すのが大好きな少女だったためだ。また、厳格なカトリック信者である父サムエル(マグヌス・クレッペル)、母ハンナ(マリア・ボネヴィー)の下で育ったにもかかわらず、「遊んで遊んで遊び死にしなかったのが不思議なくらい」天衣無縫な子供時代を過ごしたおかげらしい。

したがって、田舎の小さな新聞社ながら、そこで才能を発揮し経験を積んでいけば、きっとアストリッドはその後は全国版の新聞記者になれたはずだ。ところが、アストリッドはそこでブロムベルイと不倫関係に陥ったうえ、何と妊娠までしてしまったから、アレ……。本作では、アストリッドが「あれほど注意してと言っていたのに、どうして……？」とブロムベルイに文句をつけるシーンが登場するが、いくら1920年代とはいえ、自分から誘っておいてその言い方はおかしいのでは……。前述のように、1960年代の私たち日本の学生の感覚なら、男女を問わずただちに「墮ろそう」との結論になったはずだが、どうもアストリッドには「産まない」という選択肢はなかったらしい。

他方、本作では、そんな現実に直面した既婚者であるブロムベルイの責任ある(?)態度が顕著だから、それに注目!アストリッドから想定外の妊娠を告げられたブロムベルイは、ただちにアストリッドの両親の下を訪れ、自分のミス(?)を認めるとともに、妻と離婚した(できた)後はアストリッドと結婚し、2人で子供も育てると明言したから偉い。ところが、それに対する両親の反応は?そして、アストリッドの決断は?

■□スウェーデンの姦通罪は?デンマークの里親制度は?■□

山本薩夫監督の名作『戦争と人間』3部作(70~73年)、『シネマ2』14頁、『シネマ5』173頁)では、北大路欣也扮する五代俊介が、佐久間良子扮する兄の妻・温子と不倫関係

になり、「姦通罪で訴えられたら大変なことになる」と話し合うシーケンスがあった。日本の「姦通罪」は女性だけに適用される罪で、1947（昭和22）年に施行された戦後の日本国憲法の下では明らかに男女平等に反するものだから、姦通罪を定めていた従来の刑法183条は、同年10月の刑法改正で廃止された。しかし、本作を観る中で、1920年代のスウェーデンに姦通罪があったこと、しかも、それがアストリッドと不貞行為をし、妊娠までさせたブロムベルイに適用される（？）と聞いて、ビックリ！さて、その詳細は？

他方、長い間一人っ子政策が続いてきた中国では、2人目の子供を産むためにアメリカに渡るというニュースが報道されていたが、本作を観る中で、デンマークには父親を明かさずに産むことができるうえ、里親までつけてくれる制度があることをはじめて知ること。そして、アストリッドはそれを採用することを決意。これなら、「妻から不貞で訴えられ、姦通罪で刑務所に入るかもしれない」と暗い顔で訴えていたブロムベルイも納得だ。妻との離婚ができるまでは、そして、姦通罪の判決が出るまでは、生まれてくる子供はデンマークの里子に出せば、何とか道は切り開けそうだ。昨年の12月14日に観た『夕陽のあと』（19年）は、「生みの母VS育ての母」というテーマで、日本の里親制度や特別養子縁組のあり方を問題提起していたが、アストリッドの場合はまさに切実な自分の問題の解決として、デンマークの里親制度を利用したわけだ。しかして、その詳細は？

この両者とも、弁護士私にもよくわからない北欧特有の法制度なので、興味のある人はしっかり勉強してもらいたい。

■結果オーライなのに、なぜケンカ別れに？■

クリステンセン監督の「Director's Comment」にあるように、本作は児童文学作家アストリッド・リンドグレーンの全生涯を描くものではなく、16歳から約10年間のアストリッドの「ある一面」に「特化」し、それを集中的に浮かび上がらせた映画。したがって、本作には私が興味をもつ「法廷モノ」の側面はまったく登場しない。ブロムベルイの離婚訴訟の相手方であり、かつ姦通罪で訴えている（？）妻の姿はまったく登場せず、その情報はブロムベルイからアストリッドに口頭で伝えられるものだけだ。しかして、アストリッドが産んだ男の子ラッセの引き取りを我慢しながら、離婚調停と姦通罪事件の決着を待っていたアストリッドに、ある日ブロムベルイから伝えられた報告は、「姦通罪で有罪になったが、罰金1000クローネで済んだ」というもの。ブロムベルイはそれを喜色満面で伝えるとともに、アストリッドに指輪を差し出し正式の求婚をしたが、それに対するアストリッドの反応は？

父親を明かさなくても子供を産むことができ、里親までつけてくれる国・デンマークに一人で渡り、両親もブロムベルイもいない中で男の子ラッセを出産したアストリッドだが、その内心が不安でいっぱいだったのは当然。その上、自宅に戻ったアストリッドは、母親

から「ブromベルイとは結婚するな。子供のことは里親に任せて忘れろ」と言われたから、大ショック。支援者だと思っていた母親に裏切られたとの思いで実家を飛び出したアストリッドは、そんな不安の中、苦しい思いでスウェーデンとデンマークのコペンハーゲンを往復していたわけだ。そんなアストリッドにとって、前述のブromベルイの言葉と求婚は、ベストの結末だと私には思えたが・・・。

姦通罪で有罪になれば、当然刑務所行き。それを覚悟していたのに、罰金だけで済んだのはラッキー。ブromベルイは単純にそう考えて喜んでいただけだが、アストリッドの方は、1年以上も息子を引き取れなかった苦悩をブromベルイがまったく理解していない、と怒りがこみ上げてきたらしい。そう言われれば、「それもなるほど」、と理解できなくはないが、そうかといって、指輪を突き返し、「さよなら」を告げるほど、ブromベルイは何か悪いことをしたの？姦通罪が罰金で済んだのは優秀な弁護士が就いたおかげかもしれないし、判決の結果をブromベルイが的確に予想できるはずはない。そこらあたりのアストリッドの気持ちが私にはサッパリわからないが、クリステンセン監督はそれを観客にどう伝えたいのだろうか？さらに、そんな些細なこと(?)で一度はケンカ別れしても、しばらく経てばアストリッドも気持ちを立て直して、元の鞆に収まることもあり得るのでは・・・。そんな私の予想に反して、本作は、以降全く違う展開に・・・。

■□■この強さはどこから？新しい「いい男」の登場は？■□■

ブromベルイと決別したことは、当然ブromベルイと結婚し、ラッセを2人の子供として育てるという夢が崩れ去ったことを意味していた。また、ブromベルイの経済的支援を失ったことは、デンマークへの渡航費用も失ったうえ、明日からの生活費を自分で稼がなければならなくなったことを意味していた。そのうえ、母親に対しても、「ラッセを喜んで迎え入れてくれるまでは家に戻らない」と啖呵を切っていたから、アストリッドが今さら単身で実家に戻ることができないのも当然だ。しかし、アストリッドは仕事の面では有能だったから、すぐに国立自動車連盟でタイプの仕事に就けたのはさすが。しかも、数年の稼ぎで金銭的余裕ができたようだから、それもえらい。その結果、ラッセと暮すための部屋を借りたアストリッドは、喜びに溢れた状態で2歳半になったラッセを引き取るべくデンマークに赴いたが、そこではすっかり里親のマリー（トリーネ・ディアホーム）になつてしまったラッセが、アストリッドとともにスウェーデンに戻ることを拒絶したから、アレ・・・。もっとも、本作では、『夕陽のあと』で見た「生みの親VS育ての母」という対立に至ることはなく、マリーは「時間さえかければ、ラッセもアストリッドがホントのママだとわかってくれる」と慰めてくれたが、失意のアストリッドは？

いい女にはいい男がつくもの。世の中の相場はそう決まっている。しかして本作では、会社のダンスパーティーで泥酔してしまったアストリッドに対して、上司のステューレ・リンドグリーン（ブジョーン・グスタフソン）から救いの手が伸びてくるから、それに

注目！さらに、里親のマリーが急病で倒れたため、ラッセを引き取り、シングルマザーとしてストックホルムで生きて行こうとするアストリッドに対しても、リンドグリーンから救いの手が……。日本では、シングルマザーが母子家庭として生きていくのは大変だが、その一因は、男女平等の意識が低く、また社会保障が不十分なため。とりわけ、シングルマザーが社会で働くために不可欠な託児所や保育所の不足は深刻だ。しかし、今や世界最高水準の福祉国家になっているスウェーデンは？

1920年代のスウェーデンのそれはよくわからないが、両親の家から離れ、優しかった里親のマリーとも死別し、シングルマザーとして生きて行かなければならなくなったアストリッドにとって、ラッセが病気になれば大変。咳が続いて眠れず苦しむラッセに対して、アストリッドがしてやれることは、かつて兄や妹たちにしていたのと同じように、「お話」をしてあげることだけだった。「子どもたちが好きなだけソーダ水を飲んで、木登りをする、子どもたちが大活躍するお話」にラッセが興味を持ち、やがてアストリッドのベッドにも入ってくるようになったのは良かったが、この咳は早く医者に見てもらわなければ大変なことになるのでは……。そんな心配をしていると、ある日、医者がアストリッドの部屋を訪れ、「治療費はいいですから」と言ってラッセを診察。そして、「百日咳だが、ゆっくり養生していれば治る」と言われたから、アストリッドはひと安心。しかし、この医師は一体誰が派遣してくれたの？そして、治療費は誰が支払ってくれたの？

■□■「決定的に変えた何か」とは？この女は魔性の女？■□■

本作冒頭のクリステンセン監督の「Director's Comment」の問いは、「とても若かった頃、あなたを決定的に変えた何か起きて、あなたをこんなにも素晴らしい作家にしたのでしょうか」というものだった。

しかして、本作が終わりに近づくにつれて、クリステンセン監督流の解釈で導き出した「その答え」、すなわち「アストリッドを決定的に変えた何か」が少しずつ見えてくる。それについては、本作のパンフレットにある、前述した古内一絵、近衛はな、最上敏樹の3人も、三人三様の解釈で答えを出しているが、私はアストリッドの「したたかさ」にビックリ！すなわち、「この女できるな！」との思いと共に、ブロムベルイと別れる決断の早さ、新たなリンドグリーンとの結びつきの早さ等にビックリ！本作後半では、アストリッドの若き上司リンドグリーンの親切ぶりが顕著だが、それは当然アストリッドもわかっているはず。その結果、ラッセの百日咳が治り、やっと入社してきたアストリッドは、リンドグリーンに対して「あなたっていい人ね」と言いながら、リンドグリーンの頬にキスをしてしたが、スウェーデンでは、社員が上司に対してこんなことをするのが許されるの？

パンフレットにある「Biography アストリッド・リンドグリーン略年譜」を見ると、アストリッドは1931年にはこの若き上司・ステューレ・リンドグリーンと結婚し、リンドグリーンはラッセを引き取ったとのこと。さらに、1934年にアストリッドはリンド

グレーンとの間の女の子カーリンを産んだとのことだ。そんな女性アストリッド・リンドグレーンについて、私が発見した面白いブログは、「映画男のただ文句が言いたくて」。「映画リンドグレーンは魔性の女の物語！感想とネタバレ」と題されたブログでは、「いずれにしても僕は『長靴下のピッピ』の作者が実は魔性の女だったということを知って少し興奮しちゃいました。」と評価している。興味のある人は是非、私の評論と一緒にこのブログを・・・。

2020（令和2）年1月9日記